

窪田空穂と石井鶴三——石井鶴三宛窪田空穂の書簡から

小松源一郎（窪田空穂記念館）

一、はじめに

数年前、形文社の岩部定男氏より、「石井鶴三関連資料の中から窪田空穂の書簡を発見した。」という報告を受けた。これは、空穂と鶴三の交流を知るための絶好の資料だと思っていたところ、この書簡が信州大学に寄贈され、この度読む機会を得た。

本稿では、これらの書簡を紹介し、解説を加えながら鶴三と空穂の交友関係について述べてみたい。

先ず、窪田空穂の略歴は次のようである。

窪田空穂（本名・通治、明治十年（昭和四十二年）は、日本を代表する歌人、国文学者で、長野県東筑摩郡和田村（現・松本市和田）に生まれ、東京専門学校（現・早稲田大学）に学んだ。明治三十八年、処女詩歌集『まひる野』を刊行。その後、『濁れる川』『鏡葉』『冬木原』『去年の雪』など二十三の歌集を刊行し、近代・現代短歌に独自のゆるぎない作風を展開した。また、万葉以来の長歌を現代に再生し、新しい生命を与えた。一方、母校の教授となった空穂は、国文学者としての研究にも力を注ぎ、『万葉集』『古今和歌集』『新古今和歌集』の三大古典和歌集をはじめとする古典作品の評釈書、多くのすぐれた歌論書・研究書・評論書等を刊行した。昭和十六年に芸術院会員、昭和三十三年には文化功労者に推された。『窪田空

穂全集』全二十八巻、別冊一がある。

彫刻家・版画家・洋画家である石井鶴三と窪田空穂。二人は同時代を生き、共に芸術院会員であった。しかし、空間芸術と時間芸術という全く異なった分野での活躍であり、そんな二人の間に交友関係があったということは興味深い。二人の接点はどこにあったのだろうか。

空穂に次のような歌がある。

みちのくは雪深からんわがをとめ戸をさしかためその身いとしめ

（福田みさ子氏に）

空穂の歌集『濁れる川』より

空穂がこの歌を贈った福田みさ子は、後に鶴三の妻になる福田美佐である。鶴三と空穂の接点は、鶴三の妻・美佐が窪田空穂の教え子であったことにある。空穂は、早稲田大学の教授を務める前に、本郷菊坂の女子美術学校の教員となり、国語と英語を担当していた。この時の教え子の一人が、鶴三の妻・美佐（空穂は美佐子・みさ子とも記している）であった。美佐は卒業後、空穂を学校時代の恩師というだけでなく、短歌の師と仰いで作歌をしていた。こうした関係から、鶴三も妻をとおして空穂と親しくなっていた。

また、美佐の女子美術学校時代の同級生・磯登美（空穂は登美子とも記している）が、空穂の世話で、空穂の親友・岩本素白の妻となり、終戦後、素白が鶴三の離れに住むようになったことも、空穂との交流を深める要因となっていた。

空穂と素白が親友であり、鶴三の妻と素白の妻が無類の親友で共に空穂の教え子であったことから、鶴三は空穂、素白の共通の友となり、互いに親しくなっていた。

二、石井鶴三宛窪田空穂・操書簡の解題

1 石井鶴三宛窪田空穂はがき（仮番号【書4―283】）

はがきの翻字は次のようである。

御招きの御状拝見致しました、
喜んで参上致します、
猶ほ家内、前々よりそのつもり
にてをりましたところ、昨日頃より
感冒と見え、やゝ高い熱を出して
をりますので、これは残念ながら
御辞退致し、私だけ参上致し
ます、御受まで、拝眉 十七日

はがきの宛先は、「板橋区板橋町三―二六二 石井鶴三様」、消印は小石川雑司ヶ谷、昭和十六年一月十七日、午前八時から十二時で、速達である。差出人は、小石川雑司ヶ谷町八十八、窪田空穂で

ある。

このはがきは、石井鶴三の招待を受けた空穂の返信であり、喜んで参上するが、妻は高い熱を出して出席できなくなったことを知らせる内容となっている。

この招待に関して、『石井鶴三日記』（形文社刊）の昭和十六年一月十七日、十八日には、次のように記されている。

昭和十六年一月十七日（金）晴（前略）窪田さんより速達夫人風邪のため明日不参さる由

昭和十六年一月十八日（土）晴 理髪 四時半家を出て借楽園にゆく 窪田さん六時ついで岩本夫妻、九時まで歓談

この日記によると、鶴三が、窪田空穂夫妻と岩本素白夫妻を招いて会食し、歓談したことがわかる。鶴三の妻・美佐も同席したものと推測される。

日記に登場する岩本夫妻は、岩本素白（本名・堅一、明治十六年〔昭和三十六年〕と妻・登美である。素白は、東京北品川に生まれ、東京専門学校（現・早稲田大学）で空穂と同期で、以後長く親交を保った。早稲田大学講師を経て教授。随筆文学の講座を担当。江戸の面影を伝える随筆は、名文として評価が高い。著書『日本文学の写実精神』『素白随筆』など。『岩本素白全集』全三巻がある。

鶴三、空穂、素白の交友関係は、鶴三、素白の妻が、共に空穂の教え子であったことに由来し、前述したとおりである。

また、同じ十六年の日記には、次のような記述もある。

昭和十六年七月二十三日（水）快晴 不在中岩本さん窪田さん
 夫妻来訪ありしと

昭和十六年七月二十四日（木）桜井君と作品見に行く 夜窪田
 氏を訪う

本はがきの内容や日記によると、三組の夫婦が互いに行き来し、
 付き合ひも深かったことが窺われる。

2 石井鶴三宛窪田空穂書簡（仮番号「高5—321」）

書簡の翻字は次のようである。

啓上 私事三月下旬郷里松本市外へ疎開、去月

三十日帰京致しました、旧居は偶然にも焼残り俣共

留守居をしてをりましたので、そこへ帰つた次第です、

夏中は軽井沢に過しをり、岩本君の疎開先なる

屋代町は通過致しましたが、差支あつてつひに逢ふ

事が出来ずにしまひました、

今度帰京の後、俣事屋代町をお訪ねせし際

夫人御逝去の事を承りをりしを話の序に

申出でました、私はそれにて初めてその事を知り

詢に驚愕の情に堪へませんでした、何とも

申し上げやうもなき事にて謹んで御霊を偲び

御哀傷の程を思ふ外はありません、

早速御くやみに推参致すべきですが、実は久しく

痲病を持してをりました後とて 略儀申訳もあり
 ませんが、後日を期し書中にて申し上げます

頓首

十二月十日

窪田空穂

石井様

座下

封筒表の宛先は、「板橋区板橋町三二二六二 石井鶴三様」、消印
 は小石川、昭和二十年十二月十一日、封筒裏の差出人は、小石川
 雑司ヶ谷町八十八、窪田空穂である。

本書簡は、疎開先の信州から帰京したこと、同じく信州に疎開
 していた素白には会えなかつたことを告げ、帰京後、鶴三の妻の
 逝去を知り、悲しみを共にする気持ちを伝えるとともに、お悔や
 みの言葉を述べる内容となっている。

戦時中、天皇が東京にとどまっているのだからという理由で、
 疎開を拒んでいた空穂であったが、昭和二十年三月十日の第一次
 東京大空襲の後、家族の説得に応じ、三月十七日に長男・章一郎に
 付き添われて、長野県東筑摩郡和田村（現・松本市和田）の生家に
 疎開した。生家での空穂の日々は、戦争末期の不安を抱えながら、
 戦線に立ち去った学徒の面影を思い浮かべ、万葉集の評釈に没頭
 した。しかし、七月になると、疎開生活の居所を軽井沢へと移し
 た。空穂はこの転居について、「夏の養蚕期が来ると、私と、後を追
 ってきた妻とは、生家の手不足を見かねて、妻の生家の別荘が軽
 井沢にあり、空いているのを幸いとして、そこへ移った。」と記し

ている。「歌集について思い出す事ども(三)」より)養蚕の手助けができない空穂は、生家に迷惑がかかると考えたのである。そして、軽井沢で終戦を迎えることとなった。

書簡では、このへんの事情を記し、十一月末に帰京したと告げている。文京区雑司ヶ谷(現・目白台)の家は、強制建物疎開令で一部は破壊されたが、戦火は免れて母屋が残っており、ここに九ヶ月ぶりに帰京したのである。

空穂は「岩本君の疎開先なる屋代町は通過致しましたが、差支あつてつひに逢ふ事が出来ずにしまひました」と記しているが、岩本素白は、長野県埴科郡屋代町(現・長野県千曲市屋代)に疎開しており、鶴三はこの疎開先を訪ねている。

素白は、戦災でその持ち家である住宅を失い、蔵書等一切が灰燼に帰した。家を失った素白は、昭和二十一年に帰京し、鶴三の板橋区の邸宅にある、別棟の離れ屋に移った。このことについて、空穂は「これは両家の細君が、旧本郷区菊坂にあつた女子美術学校の洋画科の出身者で、無類の親友でもあつたことから、自然に決まつたことであつた。」と記している。(『素白随筆』岩本堅一著、春秋社刊の「素白岩本堅一君の事」より)

書簡の後半は、お悔やみの内容となっている。帰京後、長男・章一郎が屋代を訪ねた折に、鶴三の妻の逝去を知り、報告を受けたことが記されているが、鶴三の妻・美佐は、空襲下で十分な治療も受けられないまま、終戦直前の昭和二十年八月七日、五十八歳で永眠している。

3 石井鶴三宛窪田空穂はがき(仮番号「書4―282」)

はがきの翻字は次のようである。

啓、御無沙汰をしてをります。

御清祥を賀します。

現代名作名画全集宮本武蔵

御恵送下さいまして、有難くいたゞき

ました。以前にもいたゞきました。重

ねていたゞき、何回見ても心たのしく、

身離し難くて机辺に置いてをり

ます。御礼申し上げます。

六月三日

はがきの宛先は、「板橋区板橋町三二二六二 石井鶴三様」、消印は小石川、昭和二十九年六月四日、午後三時から六時である。差出人は、文京区雑司ヶ谷町八十八、窪田空穂である。

このはがきは、「現代名作名画全集宮本武蔵」を贈った鶴三への礼状である。

この書籍は、昭和二十九年の四月に六興出版社から刊行された『宮本武蔵・現代名作名画全集』(第1巻石井鶴三集)であり、前にいたいただいたものとは、昭和十八年に朝日新聞社から刊行された『宮本武蔵挿絵集』と思われる。

「何回見ても心たのしく、身離し難くて机辺に置いてをります。」と記しているが、空穂には、次のような歌もあり、鶴三の絵が好きで、日々眺めては楽しんでいたことが窺われる。

鶴三が書いてくれたるこの富士や見るにこころの親しみ入るも

空穂の歌集『明闇』より

なお、窪田空穂記念館には、鶴三より空穂に贈られた鶴三画の「宮本武蔵」が収蔵されている。

4 石井鶴三・美佐子宛窪田空穂年賀状（仮番号「書4—284」）

はがきの裏面は次のようである。

賀正

正月三日

東京市小石川区雑司ヶ谷町八八、窪田通治

はがきの宛先は、「府下、板橋町中丸 石井鶴三様 美佐子様」、消印ははつきりしないが、大正十二年と思われる。差出人は空穂の本名である窪田通治となっており、住所印が押されている。

5 石井鶴三・美佐子宛窪田空穂年賀状（仮番号「書4—285」）

はがきの裏面は次のようである。

賀正

十四年 元旦

東京小石川雑司谷八八、窪田通治

はがきの宛先は、「市外 板橋町中丸 石井鶴三様 石井みさ子様」、消印は小石川、大正十四年一月一日、午前零時から七時となっている。差出人は、窪田通治（空穂）であり、住所印が押されている。

内容はいずれも毛筆で「賀正」と書かれている。二葉とも大正時代のもので、空穂と鶴三の交友は大正時代からずっと続いていたことがわかる。

6 石井美佐子宛窪田操はがき（仮番号「書1—314」）

はがきの翻字は次のようである。

御葉がきを頂きまして有難う存じます
 本年はいつに無きゝびしき御暑さの折柄
 皆様には御さほりもなく御すごしの御様子
 何よりと存じ上げます、御心配に預つて居ります章一郎事は去る十四日に父に伴はれ信州の温泉へ転地保養に出向きまして此の夏中はあちらで過す事に成つて居ます 病気はあまり重い方ではないけれどなか／＼性質がしくつくはか／＼しく直ほらないので閉口して居ます
 主人の只今の宿
 は
 松本市外

里山辺村

湯の原

かどやかた

でございます

小石川

雑司谷町

八八

窪田操

宛先は「府下 板橋中丸二六六 石井美佐子様」、消印は小石川、大正十三年七月二十一日、午前十時から十二時となっている。差出人は、空穂の妻・操である。

この書簡は、鶴三の妻・美佐が、空穂の長男・章一郎の病気を案じて出したはがきへの返信であり、章一郎の保養に付添って留守をしていた空穂に代わって、妻・操がその病状と保養先を知らせる内容になっている。

空穂の長男・章一郎は、大正十二年九月一日の関東大震災の際の夜警の疲れなどから発病し、胸部淋巴腺炎と診断された。早稲田中学校三年生であった章一郎は、医師の勧めで学校を休学して、安房鴨川で三ヶ月の転地療養をした。しかし、この間に病状は悪化し、湿性肋膜炎となり、帰宅して、東大附属病院に百日ほど入院することになった。

本はがきは、退院後、夏の暑さを避けて松本の亡き母の実家に転地し、湯ノ原（現・松本市美ヶ原温泉）に出かけて保養していた時のやりとりである。このとき空穂は

百日あまり寝るに瘦せたるその足のひよろひよるとしてあるきやし
けむ

などの歌を詠んでいる。なお、妻・操は、最初の妻・藤野（子癩で二十九歳の生涯を終えた）の妹で、母の勧めで空穂の妻となっていた。

7 窪田空穂宛石井美佐絵葉書（仮番号「書7-147」）

はがきの翻字は次のようである。

かきさしの歌かき集め久にして君にまみゆるうたはつかしむ

其かみの女学生今老ひの女と君いひましし如かへりみましては
其かみも今かはらす君を師とたのみてわれは歌うたはまし

宛先は、「小石川区雑司ヶ谷八ノ八八、窪田通治先生」、差出人は板橋区板橋三ノ二六二、石井美佐であるが、実際には投函されなかったもので、切手も貼られていない。

内容は、空穂に送ろうとした自作の短歌作品で、絵葉書（春陽会第十三回展覧会作品 鉄橋 石井鶴三）に記されている。第十三回春陽会展は昭和十年に開催されており、この頃の作品と推定される。投函しなかったために残ったものであるが、書き終わって更に推敲の必要を感じたのかもしれない。美佐は、このようなかたちで空

穂に作品を送り、添削してもらっていたことが窺われる。このはがきに記された三首からは、美佐が女子美術学校当時からずっと空穂を慕い、卒業後も、短歌をとおして師弟関係が続いていたことがわかる。

三、おわりに

窪田空穂関係の書簡をとおして、石井鶴三と窪田空穂の交流の様子を述べてきたが、鶴三の日記によると、空穂の講演会に出かけたり、上田市の別所温泉安楽寺境内の空穂の歌碑の除幕式に参列したりしている。また、空穂の著書『日本アルプス縦走記』の装丁、表紙画、扉絵を引き受けるなど、仕事の上でのつながりもあった。

空穂も、鶴三の仕事のよき理解者であり、「石井鶴三氏の随筆集」という随筆も書いている。（歌誌「槻の木」昭和十三年三月号に掲載）この中で、鶴三の『凸凹のおぼけ』を取り上げ、「氏の語つてゐることは、それが何であらうとも、すべて氏の身に付いたものである。一口にいふと単純で、深くて、それでゐて自由に動いてゐるものである。」と評している。また「氏の文章は特色と魅力とがある。」と評し、「一種の名文と言つて差支へがない。」と記している。

「与えられた生命をいっばいに生きることが人間の本性である。」という信念のもと、数え年九十一歳で世を去るまで、たゆまず歌を詠み続け、古典に関する著作など知的・感性的な仕事にも励み続けた空穂であるが、その最後の誕生日に

我が宝天たんに積まむと祈り来ぬ天おきと広くとも置所おきとの無けむ

という歌を詠んでいる。自分の作品や研究の成果を天に見ていただくことと志してきた。しかし、今、見ていただくこととすると、自分のしてきたことは、見ていただくほどの価値はないのだとわかったと、謙虚に詠っている。

一方、鶴三も、「芸道は白刃の上を行くが如し」を信条に、八十六歳の生涯を閉じるまで精進し続け、作品を天に見てもらおうという心で情熱的に創作活動にあたった芸術家でした。

このようにみえてみると、鶴三、空穂の二人には、響き合うものがあり、本稿で紹介した日常的な交流だけではなく、精神的・思想的なつながりをもって、お互いに影響し合い与え合っていたものと考えられる。このあたりの追究が、これからの課題である。

主な参考文献

- 『石井鶴三日記』形文社刊
- 『石井鶴三展―芸道は白刃の上を行くが如し』松本市美術館刊
- 『窪田空穂全集』角川書店刊
- 『窪田空穂の短歌』窪田章一郎著、短歌新聞社刊
- 『素白随筆』岩本堅一著、春秋社刊
- 『槻の木』（歌誌）槻の木会刊

付記

本稿で紹介した書簡の翻字にあたっては、荒井真理亜氏、高野奈保氏、多田蔵人氏、出口智之氏、窪田綾乃氏のお力添えをいただきました。心より感謝申し上げます。